

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数制限のある問いは、すべて句読点などの記号も字数にふくみます。

現代はボーダーレスの時代と言われる。確かに以前は明確に「境界（ボーダー）」が見えたところが、極めてあいまいになってしまったり、もう何の区別も見えなくなったりしていることが、実に多くなった。服装を見ても、男か女かわからないときもある。年齢もはっきりしない。結婚か未婚かなど、とうていわからない。A、教師と生徒の間の会話を聞いていると、両者に何ら区別がないように感じるときがある。

個人のことだけでなく、国と国との国境も以前にくらべると、随分と弱くなったと思われる。欧州共同体のことなど考えると、すぐに了解されるだろう。国境をこえるための手続がなかなか大変だったのは、それほど昔のことではない。B、現代だと、ヨーロッパの国の人々が他国に行くのは、自国内の旅行と変わりないと言っているであろう。

ただここで忘れてはならないのは、旧ソビエトやアフリカの状態を見ればわかるが、むしろ、ひとつの「独立国」を建て、従来よりも「境界」を鮮明にしようとする動きも認められることである。今、世界を見渡しても、ボーダーをなくすことに努力する傾向と、それに対してボーダーをより明確にしようとする傾向とが認められるのは注目すべきことで、このことは後に論じることと大いに関係してくるであろう。

一部の反対の動きはあるにしろ、現代人はどうしてこのように、ボーダーレスを喜ぶのであろうか。それは、人間が「自由」を望むからである、と言っているだろう。境界は人間の自由を阻む。男の役割、女の役割が固定しているところでは、男も女も定められた役割以外のことをしたくても出来ないものである。「女だてらに大学まで行って」とか、「男のくせにしばいなんぞやりたがって」とかというような言葉を、つい最近までよく聞いたものだ。このような呪縛をとき放って自由になることは、C境界を打ち破ることなのである。

「身分」という分け方が強くあると、不自由さはますます激しくなる。このために近代になって身分という区別をなくすのに、われわれは大いに努力してきた。能力さえあれば、自分の思いどおりに教育を受けられ、自分の望みどおりに職業をつける、ということを目標にして努力を重ね、それは現代の日本ではほとんど達成されたと言っているだろう。自由を獲得することはいいことだ。

ボーダーレスになって、人間の自由の領域はますます広がるのである。

人間に関することは、どんなことであれ、よいことばかりにならぬのがその特徴である、と言っているだろう。誰もが好きな教育を受けられるようになったのはいとして、次のような現象が生じてきたのも見逃せない。ある大学の医学部の教授にお聞きした話である。医学部に入学した教養部の学生——まだ一般教養だけ学んでいて専門教育を受けていない——に、一度何か話をして欲しいと言われた。どんなことを話せばいいかと聞くと、「われわれがこれから医学を学びたくなるような動機を与えて下さるような話」をお願いすると言う。これには教授が驚いて、「君達は医学を学びたいから医学部に来ているのだろう。今さら動機を与えろもないだろう」と問い返すと、自分たちの多くは「模擬試験の成績が非常によかったから医学部に入学した」のであって、「医学を学びたい」から来たのではないと答え、教授は呆れかえってしまった、というのである。

これはいったいどういうことであろう。誰もが何でも自由に、と言われたとき、高校生たちは「自分はこれがやりたい」と希望するよりも、自分の成績に見合う——と言っても優秀さを誇りにしているわけだが——学部を選んでいたのである。それを本当に「自由」と言っているのだろうか。どこを選んでいいという自由のなかで、彼らは医学部は秀才の行くところという[○]的判断によつて、決定させられているのではなからうか。

このように考えると、あまりにも「自由」になったように見えながら、自分の本来的な姿ではなく、外からの期待や、外からの評価などにまどわされて、ホイホイと行動しているうちに、自分はいったい本当は何者で、何をしたいのかわからなくなってしまうている人間は多いのではなからうかと思えてくる。

話は変わるが、筆者の友人のスイス人で語学に堪能な人がある。一般にスイス人は多くの言葉を話せる人が多いが、彼も六カ国語くらいできるだろう。スイスは小さい国だが方言が強く、スイスドイツ語はドイツ人でもわからない。D、あなた方はそれほど語学をよくできるのだから、方言などやめて、もっと統一した言葉で話し合うようにしないのはどうしてかとたずねると、語学が沢山できて話していると、何だか簡単なことしか考えず、ニュアンスのある感覚や自分らしさがなくなって、平均化されていく

ように思う。スイスは小国で国際化が大切なので、皆、多くの語学を修得するのに熱心なのだが、それだからこそ、自分らしさを保持するための方言が必要なのだ、と答えた。

国際化ということを誤って考える人は、「国際色」というような色に、すべての人が一様に染まることのように考えるが、ことはそれとまったく逆で、日本人であれば、日本人としての固有の色を出しつつ、他の色と必要に応じてどのようにまじり、色のあやをつくり出してゆくか、ということが国際的なのである。

このようなことを考えると、ボーダーレスの時代だからこそ、自分というものの存在を、できるだけしっかりとつかむことの必要性が感じられる。自分はこれをする、しないという「けじめ」を明確にしないと、まったく、うやむやのなかにとけこんで、気がついてみると、他からの規範や支配に左右されて動いてしまっていることになる。自分自身の姿を明らかにすることができなくて、全体の流れのなかに埋没してしまうのである。

○

ボーダーレスの危険に気づくと、人はやたらに「けじめ」をつけることや、区別をすることが好きになる。その結果、ひとりよがりのナショナリズムや、中学生の細かい行動をうるさく規制することによって、「よい子」ができると考えたりするようなことが生じてくる。これらはまったくのナンセンスである。「けじめ」は外から押しつけるようなものではなく、内から本来的な自己の発見に伴って生じてくるものであることを、よく自覚する必要がある。

学問の世界にも、ボーダーレスの現象は起こって来ている。物理学、化学、生物学などという区別にかたくなにこだわっている、新しい研究などはできない。これらの区別を乗り越え、相互乗り入れを行うことによって、新しい研究領域がどんどん拓かれていくのである。このように言っている筆者自身も、京都大学在職中に同僚たちと協力して、「臨床教育学」という新しい講座の新設にかかわった。臨床心理学、教育学などとこれまで別個の学問と思われていたものが、お互いのボーダーを崩して協力し合うことによって、意味ある発展が生じてくるのである。

このような点について、いつか湯川秀樹先生が次のように言われたことが印象に残っている。これからは既成の学問領域の間にあるところ、いわば谷間の学問とも言うべきことがどんどん発展してゆくだろう。「しかし、高い山に登れないから谷間の学問をやろうなどという人には、新しい発見はできないだろう。高峰をきわめる力のある人が谷間の学問をしてこそ意義があるのだ」さすがにノーベル賞受賞者だけあって、ズバリと本質をついた言葉である。ボーダーレスの時代を生きるわれわれは、この厳しい言葉を忘れないようにしたい。

(河合隼雄『対話する家族』より)

*1 ニュアンス……意味・感情などの細かい違い。

*2 ナショナリズム……民族国家の統一・独立などを推し進めることを強調する思想または運動。

*3 ナンセンス……無意味なこと。くだらないこと。

問一 線部ア～オの中から、同じ用法で使われているものを二つ選び、記号で答えなさい。

問二 A D に入る最も適切な語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じものを二度用いてはいけません。

ア しかし イ ところで ウ そこで エ あるいは オ つまり カ そのうえ

問三 〓線部 a～e の意味として最も適切なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- a 「とうてい」
- ア それらの区別は イ どうやったところで ウ どう観察しても
- エ 見た目ではかなり オ ちがいは最も

- b 「大いに」
- ア 大変^{じんりよく}尽力して イ 十分だと思いうまで ウ 長い時間をかけて
- エ 大人数をかけて オ 可能性が高いくらい

- c 「あや」
- ア 多彩^{さい}な識別 イ 善^よし悪^あし ウ 間違い
- エ 強さと弱さ オ 多様な模様

- d 「うやむや」
- ア 不安定 イ 不明確 ウ 不誠実
- エ 不必要 オ 不人気

- e 「やたらに」
- ア 全体的に イ 強制的に ウ 主観的に
- エ 度をこして オ 周りを気にして

問四 にあてはまる漢字一字を、本文中から抜き出しなさい。

問五 本文中の「ボーダーレス」について

(1) ボーダーレスの意味を、本文中の言葉を使い、十五字以内でわかりやすく説明しなさい。

(2) ボーダーレスの時代になった理由を本文中から探し、十五字以内で抜き出しなさい。

(3) 次の例が、ボーダーレスの例であるならば A、そうでなければ B と書きなさい。

- | | | |
|-----------|--------------|-----------|
| ア 欧州共同体 | イ 独立国をつくる | ウ 職業選択の自由 |
| エ 身分制度の確立 | オ 男女の役割を固定する | |

問六 線部 1 「われわれ」とは、どのような学生を指していますか。本文中の言葉を使い、四十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問七 線部 2 「平均化されていく」と同じような意味で使われている言葉を、本文中から七字で抜き出しなさい。

問八 線部 3 「自分らしさ」とは、どういうことですか。文章中の言葉を使い、三十五字以内でわかりやすく説明しなさい。

問九 — 線部 4 「けじめ」をつける」ために大切なことは何ですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の周りの人から注意してもらうことで、しっかり者になること。
- イ 自分の本来の姿を外から発見してもらうことで、よく自覚すること。
- ウ 自分のだらしない性格に気づくことで、しっかりしようと思うこと。
- エ 自分の細かい行動を規制してもらうことで、自己を発見すること。
- オ 自分の周囲の「よい子」を見て、まねようとする事。

問十 — 線部 5 「学問の世界にも、ボーダーレスの現象」について

(1) これを言いかえると、どういう学問ですか。本文中から五字で抜き出さない。

(2) この一例として、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 物理学 イ 化学 ウ 生物学
- エ 臨床教育学 オ 臨床心理学

問十一 — 線部 6 「本質」を説明したものとして、次から最も適切なものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 谷間の学問をきわめるために、お互いのボーダーを崩して協力し合うこと。
- イ 既成の学問領域から新しい発見をするために、谷間の学問を学ぶこと。
- ウ 新しい発見をするために、ボーダーにこだわらず、その学問をきわめようと心がけること。
- エ 別個の学問とされていたもののボーダーを崩すことで、既成の学問をきわめることができること。
- オ 新しい学問をきわめるために、既成の学問領域のボーダーを崩してまで研究すること。

〔二〕次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数制限のある問いは、すべて句読点などの記号も字数にふくみます。

同窓会の案内状を受け取ったのは、去年の十一月だった。

パソコンでつくった文章に添えて、〈工藤先生もぜひお越しください〉と幹事からの手書きのメッセージもあった。おとなびた字に一瞬困惑した私は、親が代わりに書いたのだろうかとも思いかけて、さすがにそれはないか、と苦笑した。¹

〈旧六年二組〉と最初はしかつめらしく書いてあったが、途中で〈サイコーだった六年二組〉と少しくだけて、最後は〈史上最強（笑）の六年二組の思い出を二十年ぶりに語り合いましよう〉としめくくられていた。

あの子たちが卒業してから、もうそんなになるのか。あらためて気づく。十二歳で小学校を卒業して、二十年を足せば、三十二歳。あの頃の私の歳を超えた。もうじゅうぶんにおとなだ。結婚して、子どもができて、小学生の親になっている子だって多いだろう。

「あの子たち」と呼ぶのはおかしい。「あの子たち」になるのか。でも、それともなあってまた苦笑して、その顔のまま、ため息をついた。²³

案内状の文章には、一つ、嘘があった。

〈サイコーだった六年二組〉——そんなはずはない。それは五年二組の間違いだ。もしも六年二組になにか言葉をかぶせるのなら、むしろ〈サイコーだった〉のほうがふさわしい。

幹事の連中はもう忘れてしまったのだろうか。彼らにとつてはたいしたことではなかった、というわけなのか。私は違う。二十年間ずっと覚えていた。記憶はそれなりに薄れていても、決して消え去ることはなかった。

同窓会の幹事は三名いた。案内状の最後に並んだ氏名と二十年前の顔が重なるには少し時間がかかったが、そこには出ていない一人の教え子の顔は、すぐに浮かんだ。男子だ。細おもての貧相な顔立ちをしている。本名より先に、私が心の中で呼んでいたあだ名が出た。

にんじん——。

⁴ひどい呼び方をしていた。顔の形が野菜のにんじんに似ているから——あだ名を口にすることはなかったが、万が一誰かに訊かれ

たらそう答えようと思っていた。だが、ほんとは違う。ジュール・ルナールの小説の『にんじん』から名付けた。母親に「にんじん」と呼ばれ、理不尽な虐待を受けつづける少年の物語だ。中学生の頃に読んで、なんという救いのない物語だろう、と嫌な気分になった。大学時代に読み返したときも感想は変わらなかった。にんじんという少年にも、彼を虐待する母親のルピック夫人にも、虐待に気づいていながらにもしない父親のルピック氏や兄姉たちにも、とにかく物語に登場するほとんど全員にみんなの共感も寄せることができず、ただひたすら嫌な気分になるだけで、どうしてこれが名作と呼ばれるのか訝しく思ったほどだった。

そんな物語の主人公の名前を、私はかつての教え子に付けたのだ。

本名は卒業アルバムを開いてやっと思いだした。伊藤和博。三十一人いた同級生の中で真っ先に忘れてしまってもしかたない、ありふれた名前だった。

アルバムにはクラスの集合写真が載っていた。最前列の中央に座る私は若い。二十七歳——教師生活五年目で、初めて六年生を受け持った。写真を撮ったのは四月か五月、新年度が始まってまだそれほどでもない頃だった。背筋を伸ばし、膝に握り拳を置いてカメラをまっすぐ見つめる青年教師のまなざしには、気負いと緊張と、そして微妙な不安も宿っていた。いまならわかる。もつと肩の力を抜けよ、と声をかけてやりたくもなる。

にんじんは最後列にいた。ひよろりと背の高い子だった。陽射しがまぶしかったのか、シャッターを押すタイミングに笑顔を含ませそこねたのか、眉を寄せてしょぼくれた、泣きだしそうな顔をしていた。

写真を撮ったとき、私はすでに彼を心の中で「にんじん」と呼んでいた。彼のことが嫌いだった。最初に顔を見たときから、ずっと。

同窓会には、にんじんも来るのだろうか。どんなおとなになっているのだろうか。見てみたい気もするが、再会してどうふるまえばいいのかわからない。にんじんは、少年時代のあの一年間を記憶のどこに、どんなふうにしまっているのだろうか。思いだしたくない記憶のいちばん奥に、嚴重に封印をして隠しているのなら、私と同じだ。その封印が解かれたら、にんじん、おまえは私になにを言いたい？ 聞くのが怖い。たとえそれがどんな言葉であれ。

同窓会の会場で彼の姿が見えたらなかったら、私はほっとするだろう。だが、そのあとで、ひどく苦い思いを噛みしめることにも

なるだろう。

(中略)

遅刻した。地下鉄であと一駅のところまで来て電車をおりて、ホームのベンチにしばらく座っていたせいだ。にんじんと再会することだけでなく、六年二組の全員に会うのが急に怖くなった。

私はひどい教師だった。美保子を抱いて涙を流したあとも、同じ涙を教室の子どもたちの前で見せることはなかった。にんじんに謝ることもできなかったし、三十人三十一脚のいつわりの新記録のことも打ち明けられずじまいだった。

そんな私を、みんなは「先生、先生」と慕ってくれた。風間先生とくらべてどうこうは、もう問わない。とにかく六年二組のみんなは、私を最後まで信じていた。卒業式ではみんな笑顔だった。にんじんも友だちとサイン帳を回しながら、にこにこ——そう、「にやにや」ではなく、確かに「にこにこ」と笑っていた。六年二組は楽しかった、いいクラスだった、中学になってもずっとこのクラスだったらいいのに。男子も女子も口々に言って、私とのわかれを惜しんでくれた。

おとなになつたいまはどうだ？ おとなになる途中のどこかで、六年生のときの若い担任教師がほんとうは弱くてずるい男だったのだと気づいたのではないか？

二人の娘の父親になってからの私は、美保子と佳代子が担任教師に理不尽に嫌われてしまったらどうしよう、とクラス替えのたびに案じた。二人が「今度の先生って、前の先生より厳しいんだよ」「前の先生のほうがよかったなあ」と話すのを聞くたびに、縮む思いがした。もしも娘たちがあの頃の私のような教師に出会って、にんじんのような目に遭わせられたら、なにがあっても私はその教師をゆるさない。おまえは教師失格だと言ってやる。だが、万が一の想像をめぐらせてひそかに固める拳で、真っ先に頬を打たなければならぬのは、ほんとうは私自身なのだ。

重い[2]取りで会場の中ホールへ向かった。逃げるな。自分に言い聞かせた。店の看板が見えて、しつかりしろよ、と背筋を伸ばしたとき、店から出てきたせびろ姿の男が大きく手を振った。

「先生、こっちです！」

幹事の川中くんだった。案内状の名前を見ただけでは顔を浮かべるのがやっとだったのに、三十二歳の彼を見ると、小学六年生の頃の思い出が次々に浮かんできた。

そうだ、川中くん、彼が三十人三十一脚をやろうと言い張ったのだ。

川中くんの声に、店からさらに何人も出てきた。男子もいる。女子もいる。おじさんとおばさんになりかけの三十二歳のグループが、子どものようににこにこ笑って、拍手で私を迎えてくれる。

「先生、遅刻ですよ。道に迷ったんじゃないかって心配してたんですから」

「……すまん」

「ま、どうぞどうぞ、もうみんな集まっていますから。先生が来ないと乾杯できないんで、みんな我慢してたんですよ」

「……うん」

「すごいですよ、出席率八割。さすが六年二組ですよ、ユウ、キョウ、ダーン！」

川中くんがおどけて力んだ声をあげると、女子の、たしか三浦さんが、「さつきからこればかり」と笑った。思いだした。三十人三十一脚の肩の組み方の練習を「どうやるんですかあ？」と訊いてきたのは、三浦さんだった。

「ほら、先生、行きましょよ、二階をぜんぶかしきりにしてからですから」

階段をのぼる間も、みんなは私を取り囲んで「先生、俺のこと覚えてますか？」

「先生、髪薄くなっちゃいましたね」と話しかけてきた。

「いいのか——？」

私に、こんなふうに歓迎される資格はあるのか——？

みんなは子どもの頃の無邪気さのまま、なにも気づいていないのか。二十年前のことなど忘れてしまったのか。覚えていて、気づいていても、それはもう、どうでもいいことなのだろうか。

「工藤先生、とうちゃーく！」

先導する中川くんのあとについて困惑しながら会場に入ると、拍手と歓声で迎えられた。

数人掛けの円卓の一つに、にんじん、おまえもいた。あの頃の面影を残した細おもての顔で、しかし体型のほうは横幅と厚みがうんと増して、一人前のおとなになっていた。

おまえも拍手をしてくれた。隣に座った友人と言葉を交わしながら、懐かしそうなまなざしで私を見て、目が合うと、にっこりと――そう、「にやにや」ではなく、確かに「にっこり」と笑ったのだ。

胸が熱くなった。ああ、おまえはずっとその顔で笑っていたんだな、と鼻の奥がツンとした。

「先生、こっちにどうぞ」

①上座に用意された私の席の隣には、風間先生の写真が飾られていた。ばんねんではなく、まだ現役の、おそらく五年二組を担任していた頃のものののだろうか。

席について写真を覗き込むと、中川くんが「すみません……」と頭を下げた。「風間先生にもやっぱ僕らお世話になったんで……写真だけでも、来てほしくて」

私は笑ってうなずいた。「いいことだよ、風間先生も喜んでるよ」と言うと、中川くんもしんみりした顔でうなずきながら、「ありがとうございます」と応えた。

もう一度、風間先生の写真を見つめた。いまの私よりもまだ年上の風間先生は、鷹揚な笑顔で目を細めていた。なんだか、その笑顔は私のために浮かべてもらっているような気がした。

コース料理が一通り出たあとは、みんなワインのグラスを手にテーブルを移動するようになり、何人かは「ごぶさたしてます」と私のテーブルに来て、近況を報告した。商社マンになった男子がいる。結婚して三人の子どもをもうけた女子もいる。すでに二度転職した男子もいれば、夫と離婚した女子もいる。出席したメンバーはそれなりに幸せそうだったが、欠席の返事をよこしたり連絡がつかなかったりした同級生の中には、すさんだ生活を送っている者や、両親でさえい場所がわからない者もいるのだという。「ユウ、キョウ、ダン！」の合言葉どおりには人生は進まない。みんなもそれを実感しているのか、話題はいつしか三十人三十一脚のことに

なった。

楽しかった、と誰もが言った。それも、いい記録を出したときのことよりも途中で転んでしまった思い出のほうを、みんな懐かしがっていた。

いつわりの新記録のタイムは、誰も覚えていなかった。にんじんを選手からはずしたことは話題にもものぼらなかった。途中からは「あれ？ それって六年生じゃなくて五年生のときだったっけ」と思いつきの順番があやふやになり、酔いが回ってくると「まあ、どっちにしても小学校時代の思い出でいいじゃん」とみんな笑った。

風間先生は写真立ての中で鷹揚に笑う。

なあ、工藤くん、子どもの頃の思い出なんてそういうものだよ――。

気負いつづけた若い教師の肩に軽く手を載せるように、目を細めて笑うのだ。

にんじん。

おまえが私のテーブルに来たのは宴の果てる間際だった。途切れなくつづいていたほかの同級生の近況報告がようやく一段落して、私の隣が空いたのをみはからったように、すうつと席についた。

「すみません、ごあいさつが遅れました」と会釈したおまえは、「伊藤っていいいます。伊藤和博ですけど、先生、覚えていらっしやいますか？」とつづけた。

「ああ……よく、覚えてる」

なんの屈託もないおまえのあいさつに戸惑って、**3**がうわずった。

「そうですか、うれしいです。僕、小学生の頃はあんまり目立たなかったから、すぐに忘れられてるんだと思ってました」

「いや……そんなことはない、よく覚えてる……きみのことは」

「三十人三十一脚で補欠だったんですよ、僕」

皮肉をおつける口調ではなかった。笑顔もゆがんでいない。応える言葉に詰まる私をよそに「あのときは悔しかったけど、実力の

世界だし、ベスト記録も出たんだし、いい思い出ですよ、あれも」と懐かしそうにつづけて、近況を報告した。
中学の教師になっていた。すでに結婚をして、一人息子はこの四月に小学校に入学する。

「……先生になったのか」

「ええ。公立の中学校なんで、けっこう荒れて大変ですけど、やりがいがあります」

おまえは自分の仕事を誇るように軽く④を張って、酔いの回った会場のにぎわいにまぎれてしまいそうなほど静かにつづけた。

⑧教師は完璧な人間しかなれないわけじゃないって、先生に教わりましたから」

あわてて口を開きかけた私を制して、「恨んでませんよ」と笑う。「もう、昔の話ですから」

⑤が詰まる。背中がこわばって動かない。だが、おまえは、そんな私に——まるで教師が教え子をさとすように「恨みごとを言いたいんじゃないんです、ほんとうに」とつづけて、携帯電話の画面を開いて見せた。待ち受けの画像は幼い男の子の写真だった。

「息子です。僕以上に目立たなくて、勉強もたいしてできそうになくて、顔もかわいらしいわけでもないから……小学校に入っても、あんまり先生にはすかれそうにないんですよ」

でもね、とおまえはつづけたのだ。

「もしも、息子の担任が工藤先生みたいなことをやったら……僕は、絶対にゆるしません」

⑨私は黙ってうなずいた。なぜだろう、追い詰められているのに、不思議と救われた気分だった。いま、私は二十年前の罪に罰を与えられている。やっと罰してもらえた。それは身を切られるようにつらくて、苦しくて、だからこそ、もっと大きなものに包まれて、ゆるされているような罰だった。

うつむいた。くちびるを結んだ。言わなければならない言葉がある。だが、それは、決して⑥にしてはならない言葉なのかもしれない、とも思う。

私にできることは、顔を上げて、おまえをまっすぐに見つめるだけだった。おまえもわたしのまなざしを受け止めてくれた。言いたいことはわかりますよ、というふうにならずき、でも言わなくていいんです、と⑦を振って、「生意気ですけど……先生も、いまはすごくいい先生になってるんじゃないかな、って」と微笑んでくれた。

「……年下だったんだ、いまのきみたちより」

「ですよ、なんか嘘みたいだけど、もう、僕ら、あの頃の先生を追い越しちゃったんですよ。ほんと、ちょっと信じられないけど」

「だめなところ、いっぱいあったな」

そんなことないですよ——とは、おまえは言わなかった。代わりに、「学校の先生って難しいです。まだまだ、僕なんか、失敗しなきゃわからないレベルですから」と、くすぐったそうに⑧をすくめた。

「……後悔することは、たくさんあるよ」

小さくうなずいたおまえは、私のグラスにワインを注いだ。

ありがとう。私は言った。声にはならなかったが、自然と、口がその形に動いた。先生になってくれて、ほんとうに、ありがとう。

おまえは照れくさそうに笑って、「いい先生になります」と応え、席を立った。

ありがとう。もう一度つぶやいて、遠ざかるおまえの背中に小さく一礼すると、目に涙がにじんだ。

顔を上げる。二十年後の教え子たちが、にぎやかに酒を飲み、語り合っ、笑い合う。おとなになった子どもたちが、愚痴をこぼしたり、自慢したり、励まし合ったり、慰め合ったりしている。幹事たちは二次会の会場の地図を配っている。私の隣には、にんじんを最後に誰も来なくなった。教師の順番はもうおしまいということなのだろう。

空いたテーブルにぽつんと座った私は、グラスを風間先生の写真にそっと掲げて、ワインをすする。涙の名残でまぶたがほんのりとあたたかくなった。フロアで立ち話をしている連中にさえぎられて、にんじんの姿はもう見えなかった。

(重松清『せんせい。』より)

*1 理不尽……物事の筋道が立たないこと。道理に合わないこと。

*2 ユウ、キョウ、ダーン……五年生のときからのクラスの合言葉。「友情・協力・団結」を縮めて、ことあるごとに元気いっぱいに口にしていた。

問一 ― 線部⑦③について、ひらがなは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。なお、送りがなが必要な場合は送りがなも書きなさい。

問二 ― 線部の①⑧に入ることばを次から選び記号で答えなさい。ただし、同じものを二度用いてはいけません。

ア 足	イ 息	ウ かぶり	エ 肩	オ 口	カ 声
キ 手	ク 鼻	ケ 身	コ 胸	サ 目	

問三 ― 線部1「苦笑した」について、その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 二十年前に小学生だった教え子からのメッセージがおとなびた字だったから。
 イ おとなになった教え子のすがたを思い浮かべられない自分に気づいたから。
 ウ 親が子どもの代わりに書いたのだろうかと想像しただけでおかしかったから。
 エ 教え子がおとなになった事実から自分が年老いたことを改めて自覚したから。
 オ 「サイテーだった」クラスなのに「ぜひお越しください」と招待されたから。

問四 ― 線部2「苦笑して」について、その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「あの子たち」と呼ぶのも「あのひとたち」と呼ぶのもおかしいから。
 イ かつての教え子を「あのひとたち」と呼ぶのはみずくさい気がしたから。
 ウ 小学生だった教え子がおとなになっていると思うとおかしかったから。
 エ 今となっては自分のなかで教え子たちは「あの子たち」ではないから。
 オ 教え子を「あの人たち」と呼ばなければならない年齢に自分もなったから。

問五 ― 線部3「ため息をついた」について、その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 苦い思い出のあるクラスの同窓会に出ることに気乗りしないから。
 イ 「サイコーだった六年二組」という案内状の文章はウソだから。
 ウ 二十年間ずっと苦しめられたクラスの同窓会に出るのはいやだから。
 エ 結婚して、子どもができた教え子に会々と自分の老いを感じるから。
 オ 担任をしていたときの自分の年齢を超えた教え子には会いたくないから。

問六 ― 線部4「ひどい呼び方をしていた」とありますが、その理由はなんですか。「から。」に続くように本文中から十字以内で抜き出しなさい。

問七 — 線部5「にんじん、おまえは私になにを言いたい？」について、「私」が予想していた言葉と、実際に「にんじん」が言った言葉をそれぞれ指定された字数で本文中から抜き出しなさい。

(1)「私」が予想していた言葉二カ所。二カ所ともに九字。

(2)「にんじん」が言った言葉一カ所。七字。

問八 — 線部6について、なぜ、「ひどく苦い思いを噛みしめることに」なるのですか。次の文の に当てはまる言葉をそれぞれ指定された字数で答えなさい。

(1)十五字程度

と安心する一方で、

(2)二十字以内

と思うことになるから。

問九 — 線部7について、「万が一の想像」の内容について、本文中の言葉を使って、二十五字以内で説明しなさい。

問十 — 線部8はどのようなことを言っているのですか。次の文の に当てはまる言葉を五字以内で本文中から抜き出して答えなさい。

二十年前の「私」は

だったこと。

問十一 — 線部9について、「救われた」とあるのはなぜですか。四十字以内で答えなさい。

解
答
用
紙

氏名

整理番号

得 点

[illegible][illegible]